

## 県立大学設立委員会（第6回）

1 日 時：平成28年3月14日（月） 午後3時～5時

2 場 所：長野県庁 特別会議室

### 3 出席者

委員：安藤国威委員長、金田一真澄副委員長、上野武委員、  
内堀繁利委員、太田光洋委員、笠原賀子委員、上條宏之委員  
濱田州博委員、山内弘隆委員、山浦愛幸委員  
オブザーバー：長野市副市長 黒田和彦  
県総務部長 原山隆一  
事務局：総務部県立大学設立準備課長 増田隆志 ほか

### 4 議事録

（事務局）

皆様、本日は年度末のお忙しいところ、足元の悪い中、県立大学設立委員会にご出席をいただきまして、ありがとうございます。私、総務部県立大学設立準備課の宮原と申します。しばらくの間進行を務めさせていただきます、どうぞよろしくお願いいたします。

定刻前でございますが、あらかじめお手元にお配りしてございます、会議資料の確認をさせていただきたいと思っております。お手元に申し上げております、会議次第、それから裏面に設立委員会の委員名簿、設立委員会の設置要綱がございます。そのあと、資料1といたしまして、第5回県立大学設立委員会以降の準備状況等について。それから資料2といたしまして、開学までの主な検討事項とスケジュールについて、1枚でございます。資料3といたしまして、新県立大学の名称について（案）。資料4といたしまして、新しい学生寮の名称について（案）。資料5といたしまして、総合マネジメント学部・学科の名称変更についてでございます。資料6としまして、新県立大学の使命と全学共通のポリシー、以下ポリシーの関係で各学部、学科ごと付けてございまして、4枚ほどの綴りになっております。それから資料7といたしまして、新県立大学の入学者選抜の概要（案）、これが2枚一組でございます。資料8としまして、新県立大学の総合教育科目について（案）でございます。資料9としまして、学生納付金（授業料等）の設定について。資料10といたしまして、新県立大学の専任教員等の選考状況について。資料11としまして、新県立大学の施設整備について、カラーの資料になります。以上でございます。もし不足等ございましたらお申し出をいただければと思います。よろしいでしょうか。

また、本委員会につきましては公開での開催とさせていただいております。委員の皆様のご発言内容につきましては、後日それぞれご確認をいただいた上で、議事録といたしまして、県のホームページに掲載をさせていただきたいと存じますので、ご了承をお願いいたします。

それでは、ただ今から「第6回県立大学設立委員会」を開会いたします。はじめに、長野県総務部長の原山隆一よりご挨拶を申し上げます。

(原山総務部長)

皆様こんにちは。総務部長の原山でございます。第6回県立大学設立委員会の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。安藤委員長をはじめ、委員の皆様方におかれましては、年度末の大変お忙しい中、ご出席をいただきまして、心から御礼申し上げます。

新しい県立大学につきましては、平成30年4月の設立に向けまして、安藤理事長予定者、金田一学長予定者、そして本日お集まりの委員の皆様方に、教育課程の編成、教員選考、入学者選抜方法など、精力的に検討を進めていただいております。

本日は、それぞれご専門の立場から、また、全体的な視点から、忌憚のないご議論をいただきまして、ご指導を賜りたいと考えております。

先ほどでございますが、本日の県議会で県の平成28年度当初予算案につきまして議決をいただきました。「信州創生の新展開」ということで、その第一が、「学びの郷 信州の創造」でありまして、信州高等教育の更なる飛躍や地域の発展を担う「新県立4年制大学」の設置を位置づけているところでございます。

また、本日の議会では、新県立大学の三輪キャンパスの建築等、大学関連議案につきましても、お認めいただきました。

委員の皆様には、基本構想や設計の段階から真摯にご検討を頂戴してまいりましたが、お蔭さまで、ここに来まして、ソフト・ハードとも大学の形が具体化しております。

現在の委員任期は今月末までとなっております。任期末にあたりまして、これまでのご尽力に、改めて御礼を申し上げます。

新県立大学が、素晴らしい魅力を備えた大学として開学を迎えられますよう、皆様方には、今後ともお力添えを賜りますことをお願い申し上げまして、冒頭の挨拶とさせていただきます。今日は、よろしく願いいたします。

(事務局)

ありがとうございました。続きまして安藤委員長からごあいさつをお願いいたします。

(安藤委員長)

委員長の安藤でございます。座って挨拶させていただきます。

今日は大変お足元の悪い中、ほとんど全員の委員の方へ出席いただきまして本当にありがとうございます。

先ほど原山総務部長さんからも話ありましたが、本日の県議会で平成28年度の予算が可決されたということで、大変喜ばしいと思っております。その中でも特に中核を形成する施策の中で、先ほども話がありましたように「学びの郷 信州の創造」ということで、高等教育の充実ということが、いの一番に挙げられているということでございます。その意味からも、新県立4年制大学への期待が、大変大きいと感じております。

かねてから、私は地方創生のためには、産学官が一体となった連携が必要だと、ずっと主張してきたわけですが、その中核に、この新しい県立大学がなるんだと、そんなふうに認識しております。特に地方におきましては、大学の果たす役割がこれからもっともっと大きくなっていかなければいけないと思っております。その意味で、この新しい県立大学を通じまして、積極的にその役割を果たしていきたいと考えております。

そんなこともありまして、私は、前回の委員会以降も、県内の企業に、できるだけ時間を見つけて訪問させていただきまして、経営者の皆様方と色々な意見交換をさせていただいております。もちろん大学の趣旨や理念を理解していただくこともありますが、同時に、どのような企業から期待があるかといったことも積極的に話を聞いております。

全体的に大学の構想につきましては、非常に大きな期待が表明されておりました。そのためにも、県内の皆様の期待に応えるためにも、私共が、これまで述べてきたことをぜひ実現していきたい、また、その責任もあると考えております。

開学まであと約2年と迫ってまいりまして、文部科学省への大学設置認可申請も迫ってきております。具体的な準備を進める大変大事な時期に差し掛かっておりますので、私も、皆様方と共に議論に参加して、積極的に実現のために努力をしていきたいと思っております。

先ほど説明がありましたけれども、本日の委員会は非常に内容が豊富でして、特に今回の大学設立においては根幹の部分が説明されておりますので、是非皆様方の積極的なご意見を頂戴したいと考えております。ということで、簡単ですけど、冒頭の挨拶に代えさせていただきたいと思っております。今日はよろしく願いいたします。

(事務局)

ありがとうございました。なお、本日は、徳永委員が都合により欠席されておりますので、ご報告させていただきます。

また、本委員会の事務局であります、課長の増田以下職員が出席をさせていただいておりますので、よろしく願いいたします。

それでは以降の進行につきましては安藤委員長にお願いをしたいと存じます。よろし

くお願いいたします。

(安藤委員長)

それでは早速議事に入らせていただきたいと思います。まず、次第の(1)第5回県立大学設立委員会以降の準備状況等について、それから(2)の開学までの主な検討事項とスケジュール等につきまして、事務局からご説明をお願いいたします。

(増田課長)

それでは、恐れ入りますが、資料1をお願いいたします。前回、平成27年12月18日の準備委員会以降の準備状況について説明をさせていただきます。

1の設立に向けた検討状況等でございますが、部会の開催状況を中心にご報告させていただきます。①に記載のとおり、当委員会の金田一副委員長を部会長に、太田委員、山内委員にも参加をいただきまして、教育課程・教員選考部会を2月15日に開催いたしました。カリキュラム編成や総合教育科目等について、検討をいただいたところでございます。いずれも今後さらに修正を加えていく過程として検討いただいたものでございます。カリキュラム、それから健康社会マネジメントプログラムにつきましては、前回の当委員会で確認いただいたもの、あるいは公募制についてお認めいただいたものをベースに検討を重ねているところでございまして、本日新たな案としてのお示しはございません。が、新たに案が示されました総合教育科目につきまして、基本的考え方や特色について、後ほど部会長でもいらっしゃいます金田一副委員長からご説明がでございます。

今後、教育課程・教員選考につきましては、設置認可申請までに固めまして、海外プログラム等内容も決定し、さらには開学に向けてセンター機能といったことも含めた教育内容を固めて体制を整備していくということになるものでございます。

②の入学者選抜専門部会でございますが、こちらも金田一副委員長を部会長に、太田委員、山内委員にも加わっていただきまして同じく2月15日に開催したところでございます。後ほど、部会での検討をもとに入学者選抜方法の概要についての案を取りまとめたものをご提案申し上げます。

それから、③の管理運営部会でございますが、安藤委員長を部会長に、金田一副委員長、徳永副委員長によりまして、2月12日に開催いたしました。大学の名称、あるいは学則の基本的事項等について検討いただいたところでございます。大学の名称等につきましては、この後、ご提案を申し上げます。

今後の予定でございますが、新しい大学は法人化ということでございますので、公立大学法人組織の具体化や、人事制度等の構築に当たっての検討を実施してまいる予定でございます。

(2)の地域住民・企業等への説明状況でございますけれども、記載してございますと

おり、大学の建設予定地の周辺地域の方々に対して、施設整備に当たっての説明会、あるいは大学の内容についての意見交換等も実施してきているところでございます。また、安藤委員長には先ほどお話がございましたように、県内企業の方との意見交換も実施していただいているところでございます。

引き続きまして資料2の『開学までの主な検討事項とスケジュール』について、資料2をお願いいたします。

冒頭に、開学までのスケジュールを示してございます。先ほど来、話が出ておりますように、28年度、来年度の10月に大学設置認可申請、そして30年4月の開学に向けて準備を進めていくということでございます。平成28年度の主な事業予定ってということで、ちょっと細かい字で来年度中に決定すること、検討して、あるいは整備していくことの主なものを示してございます。記載のとおりでございますけれども、教育課程の確定、教育内容の具体化、並行して教員予定者の選考・確定が必要になってまいります。それから入学者選抜方法等についても、本日ご提案申し上げるものよりもさらに詳細を決定していく必要がございます。

こうした県立大学の具体化に合わせまして、県民、それから高校生、あるいは企業等に対しまして、新しい大学はこういうものであるということの周知をしてまいりたいと考えております。同時に、建設工事等の施設整備を進める。それから独立行政法人化への準備を進めるというのが28年度中の日程でございます。

先ほど、総務部長からも予算が議決されたとの話がございましたが、最後に28年度の新県立大学設立準備事業に係る当初予算について、概要を記載しているところでございます。記載のとおり、内容の検討や広報として4,200万円、設置認可に係る費用、それから一番大きいのが大学施設の建設工事等として、19億7,000万円余、全体では20億4,000万円余の予算となっているところでございます。

設置審の申請期限、開学のスケジュールの終わりが明確になってくる中で、具体的なものを決定し、制度設計、施設整備、広報等を進めていくという時期でございますので、引き続き皆様にはご指導をよろしくお願い申し上げます。

以上、委員会後の検討状況と主な今後の予定等についてご説明させていただきました。よろしくお願い申し上げます。

(安藤委員長)

ありがとうございます。ただ今の事務局からのご説明に対して、何かご質問等あればよろしく申し上げます。最初に、金田一先生何か補足はございますか。

(金田一副委員長)

ただ今、増田課長のほうからご報告がありましたとおりでございます。準備につきましても、大変順調に進めている状況でございます。これも今日、お集まりいただきまし

た設立委員の皆様の温かいご支援、そしてご協力、そして的確なアドバイスによるものと改めて感謝申し上げます。

とはいえ、今後のスケジュールにもありますとおり、まだまだ今後いろいろな問題がございます。ぜひ今後ともご支援、ご協力のほどお願いしたいと思います。このスケジュールにつきまして、また進捗状況につきましては以上、簡単ですけれどもお話しさせていただきました。

(安藤委員長)

ありがとうございました。この後、個別のいろいろ議題が出てまいりますけれども、現時点でどなたか質問等ありましたら受けたいと思いますけれども。もしなければ、次の議題に移らせていただきたいと思います。

それでは議事の3、『新県立大学の名称について』、それから『新学生寮の名称について』、そして5、『総合マネジメント学部・学科の名称変更について』。この3点、名称につきましてまとめて議論したいと思います。それではまず、事務局からご説明をお願いいたします。

(増田課長)

それでは、資料3、資料4、資料5でお願いいたします。まず資料3、『新県立大学の名称について(案)』とございますけれども、記載のとおり、名称については長野県立大学とすることを提案するものでございます。理由といたしましては、記載してございますが、長野県が開設する公立大学であること、それから、簡潔で分かりやすいこと等でございます。

経過について若干ご説明申し上げますと、2に記載のとおり、昨年12月25日から1月15日にかけて公募を実施いたしました。長野、信濃といった地域の名前、あるいは学問分野、設置主体等に由来した名称69件の応募をいただいたところでございます。その後、2月12日の管理運営部会で検討いただき、長野県立大学と案を絞り込んだというものでございます。

引き続きまして、資料4をお願いいたします。『新学生寮の名称について(案)』でございます。新学生寮の名称といたしましては、ここにごございますように、『後町キャンパス 象山寮』とするというものでございます。理由といたしましては、幕末期において、いち早く海外に目を向けて、また教育者でもありました佐久間「しょうざん」、あるいは佐久間「ぞうざん」、長野県出身でございますけれども、この名を冠したものとするというものでございます。

なお、この「しょうざん」、「ぞうざん」については読み方について諸説ございますが、県歌『信濃の国』に出てくる読み方も『ぞうざん』でございますし、地域では「ぞうざん」と呼びならわしているということもございまして、親しみを込めて『ぞうざんりょ

う』と呼ぶということとしてございます。提案の経過ですけれども、2に記載のとおり、45件の公募をいただきまして、事務局の案も含めて管理運営部会で検討し、案を絞り込んだということでございます。

引き続き、資料5についてお願いいたします。『総合マネジメント学部・学科の名称変更について』でございます。総合マネジメント学部・学科(仮称)と今まで称してまいりましたこの名称につきましては、教育課程・教員選考専門部会で学部の特徴ですとか教育内容に合わせてどのようなものがふさわしいか検討いただいていたところでございます。その結果、去る2月15日の専門部会におきましては、記載のとおり『グローバルマネジメント学部・グローバルマネジメント学科』とすることがまとまりました。

理由といたしましては、この学部がグローバルな視野を持ち、事業を展開できる起業家、ビジネスリーダー、地域社会のリーダーの育成を目指す学部であるということ、また、地域に軸足を置きながらも直接世界とつながり、世界との関係性の中で物事を考えることができる、そういった視野を持った人材を育成するといった教育内容を体現するのに、グローバルマネジメント学部・学科がふさわしいとするもの等でございます。以上でございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。この名称につきましては、私はもともと長野県立大学と呼んでいましたので、今さら正式にというのもおかしな話だと思っているのですけれども。それから、学生寮は「後町キャンパス象山寮」ということで、我々の内部では非常に優勢というか、皆さん支持をする方が多くて、ぜひこれを提案したいと思っております。

それから、総合マネジメント学部の名称変更につきましては、いろいろ紆余曲折もあったのですが、やはり我々の行おうとしていることが一番率直に分かりやすいということで、あえて総合というような割と総花的な名前よりも、グローバルということをちゃんと付けようということでグローバルマネジメント学部・学科としたわけでございます。

その総合マネジメント学部の名称変更につきまして、山内先生何かご意見ございますか。補足説明というか、先生の強い意見で変えたと思っておりますけれども。

(山内委員)

総合マネジメント学部っていう名称も、かなり我々の間では親しんだといいますが、浸透しておったのですけれども、いくつか理由がございまして、一つは他にも似た名前の大学の学部があるということ。それから地域、グローバル、このグローバルっていう言葉は世界に通じる、地域からとか、そういう意味を込めておりますので、そういったところをここに冠して使ったらどうかと。グローバルって言葉は逆に既にかかなり使われ

ていますので、その辺に対するマイナスのイメージがないことはなかったのですけれども、今申し上げたような理由で、学部のスタッフの有力な先生方、スタッフになり得る予定の先生方の支持を得ましたので、この名前にさせていただきました。以上でございます。

(安藤委員長)

ありがとうございます。金田一先生は何かありますか。

(金田一副委員長)

今、山内先生のほうからありましたとおりで、マネジメント学部の専任教員が今内定でかなりの数決まっておりますけれども、その先生方のご意見を伺って、このグローバルマネジメントがいいというご意見だったので、それでこの名前がいいのではないかと  
いうふうに決めさせていただきました。そこだけ補強を。

(安藤委員長)

ということで、これが私どもからの提案なのですが、他の委員の方からもしご意見等あればこの機会にいただきたいと思います。どなたかありますでしょうか。

(山浦委員)

大学の名称なのですが、正式に表記するときは、公立大学法人長野県立大学、こう書くのですね。

(金田一副委員長)

そうです。

(安藤委員長)

今回はあえて大学の名称について英語のことは触れていませんけれども、内部では長野県立ユニバーシティというかですね、そのまま使おうかという案が有力だということですね。ということで、もし特にご反対がなければこの3つを一応決めさせていただいて、これから手続き等を進めさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。ということで、この3つの名称でいくということで決めさせていただきます。ありがとうございました。

それでは、次の議題に移らせていただきたいと思います。議事の(6)『アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー』についてですけども、金田一先生から、前々回の設立委員会との変更点を中心にご説明をお願いいたしま

す。

(金田一副委員長)

承知いたしました。この『新県立大学の使命と全学共通のポリシー(案)』というのが資料の6にあります。ここでポリシーだけをとったのですが、まず県立大学の使命をその上に挙げておいたほうがいいのではないかとということで、まず使命を考え、その上でポリシーを挙げていくという形を取らせていただきました。

使命のほうを読ませていただきます。『本大学の使命は、新しい時代に求められる国際教養と、高度で実践的な専門性を培う「知の拠点」となり、高い志と豊かな人間性を身につけた、未来社会を築き動かす若者を輩出し、広く世界を俯瞰する視座に立って、地域の産業・文化・教育の発展に寄与するとともに、世界に長野県の溢れる魅力や活力を強く発信することである。』というふうに書かせていただきました。この発信すること、一つの新大学の特長に挙げようか、キーワードとしようというふうに考えております。それに基づいてポリシーを考えました。

アドミッション・ポリシーにつきましては、そこにも書きましたけど、『高い目標に積極的に挑戦しようとする意欲と夢を抱き、広く世界に強い関心を持ち、地域社会の発展に積極的に貢献できる人を求めます』ということで、意欲、それから好奇心のようなものを強く掲げました。

一方、カリキュラム・ポリシーにつきましては、具体的にどういう教育をするかということ併記する形で書かせていただきました。ゼミ形式の少人数授業、必修である海外プログラム、英語集中のプログラム、ディスカッション重視の総合教育科目、PBLというのはプロジェクト・ベースド・ラーニングですけれども、これはグループで行うということでございます、組み込んだフィールドワーク、それから全寮制による全人教育、こういったものが新大学の特長になると思うのですけれども、これらを通して『学生一人一人の資質にあわせて長所を伸ばし、潜在能力を引き出す親身で身につく教育を行います。』この親身で身につくということも実は大事ですけれども、少人数ですので親身な教育、それからある程度厳しい、身につく教育ということをカリキュラム・ポリシーで謳っております。その結果としてどういう卒業生を輩出するかということでディプロマ・ポリシーがあります。

『グローバルな時代に適応できる資質と、不確実な世界を生き抜く逞しさを持ち、生きる拠り所となる深い専門性と幅広い教養を身につけ、誰とでも協働できる豊かな人間性と、地域の社会・産業・文化の振興に寄与する、イノベーション創出能力を備えたリーダーを輩出します。』というかなり欲張った書き方になっておりますけれども、一応ポリシーですので、これだけのことを目指していこうという心構えをもって書かせていただきました。

これが大学全体のポリシーになります。実は大学全体のポリシーは、高校生はあまり

読まないというふうに聞いております。ですので、むしろ各学部学科のポリシーのほうが実は大事だということでございます。これにつきましては、それぞれ専門のトップの方に書いていただきました。

この中で前回と変わりましたところは、総合マネジメント学部、まだ総合になっていきますけれども、このマネジメント学部のアドミッション・ポリシーの所に、下から6行目、『社会をよい方向へ改善するため、新たなことに挑戦する意欲(起業家精神)』と書きました。起業家精神というような文言を新たに前回に付け加えさせていただいたのが修正点でございます。他はほとんど変わっておりません。マネジメントとは何かというようなことを高校生に聞かれておりますので、最初のアドミッション・ポリシーでは最初にマネジメントはこういうものだという説明を付けております。

このような形で、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、そしてディプロマ・ポリシー、以上、他は前々回に挙げましたものとほとんど変わっておりません。また健康発達学部のほうの食健康学科のポリシー及びこども学科の各ポリシーも前々回の9月に行いました委員会で提出したものとほとんど変わっておりません。

説明会を去年やりましたが、説明会で新大学についてやはり食健康とかこどものほうは比較的良好に知られているのですけれども、マネジメントについては非常にまだ、そういう学部を立てるとということ自身、知られていない部分が大変大きいので、ぜひこの辺り、今後広報に努めていかなければいけないというふうに考えております。私のほうからは以上でございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。今、金田一先生からご説明ありましたけれども、前々回から今回に至るまで相当忘れてしまったこともありますので。笠原先生、少し何か補足的なご説明ありますか。

(笠原委員)

食健康学科におきましては、基本的な管理栄養士の資格取得のためということもありますが、それと同時にこども学科との連携による幼児期からの食と生活習慣の確立、といったようなものも含めまして、それからもう一つ大きな特徴としては、グローバルマネジメント学部との新しい視野に基づいた管理栄養士の創造というところで、今までにない管理栄養士の育成ができるものと確信しております。

それに伴いまして、長野県の健康長寿を支えるために必要な要素というものを盛り込みました。それと合わせて、新しい産業として、食・健康を主軸とした食産業への貢献といったようなことも踏まえて、高度な知識と技術を持った管理栄養士の養成ということに向かっていきたいと思い、それぞれのポリシーを作成したところです。

(安藤委員長)

どうもありがとうございます。こども学科について、特に太田先生、何かありますか。

(太田委員)

いや、前回と特に変わってはいないです。

(安藤委員長)

ということで、他のもし委員の方からもご意見等あればいただきたいと思っておりますけれども。濱田先生どうですか。

(濱田委員)

このポリシーというのは非常に設定が難しいのではないかというふうに私は思っております。特に使命の所に長野県のって書いてあるので長野県のっていうのは分かるのですが、何となくパッとこの長野県の文字を消すと、長野県の県立大学としての特長がどこで表わそうとしているのかなってというのが、パッと見た感じが分からない点があるかなというふうに思っております。どこかに、使命、ポリシー、そういうのをちょっと一言、一言では表わせないのかも分からないのですけれども、入れていただくといのかなという感じはします。

(金田一副委員長)

なるほど。

(濱田委員)

今、逆に、国立大学法人、特に地方の国立大学法人は、地域とのっていうのをかなり意識した形になっていまして、なかなか我々の所もこういうポリシーとかには、国立大学ですので、入れてはないのですが、それでもそれらしい言葉は学部レベルとかそういう所でも入れていますし、前面に出るような戦略とかにもそういうのを入れているので、ぜひ県立大学としての、そういう長野県だっというの分かるようなことがあるといいのかなというふうには思っているのですけれども。

(安藤委員長)

なるほど、ありがとうございます。そうですね。私も、長野県って入っているのも、非常にいいなと感じてはいたのですけれども。分かりました。もう少し考えてみます。

(上條委員)

よろしいですか。このポリシー、とりわけ受験生に対しては、アドミッション・ポリ

シー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーというのが重要だと思うのですが、一つ最初に質問しますけれども、先ほどグローバルマネジメント学部・学科とするというふうになりながら、総合マネジメント学部、総合マネジメント学科という言葉でポリシーがあるのは、今日こういうふうに決まればその文字を変えるという意味でしょうか。

(安藤委員長)

はい、その前提です。

(上條委員)

そうですね。それで今、お話がありましたように、長野県の公立大学、県立大学であるという特長がどこにあるのかということと、資料6の最初の全学共通ポリシーのカリキュラム・ポリシーの所ですが、総合教育科目については重視するということが書かれているわけですが、それとの専門科目とか、キャリア教育についての部分はどうかかなということが見えないという感じが私はいたします。

特に公共経営とかいろいろ出てくるわけですから、公立大学としての立脚点を見えるようにしたほうが、一般的なグローバルマネジメントの違いですね、そういうものが受験生にも分かるのではないかと。

全体的に言いますと、これはやむを得ない部分もあるのですが、健康発達学部のほうは、かなり具体的に、卒業した後どういう分野で活躍できるのかということが見えますけれども、肝心のグローバルマネジメント学部・学科の卒業生の具体的な、どういう場で活躍できるのかということが、かなり抽象的だなと。高校生に分かるのかなという感じがぬぐえない。そんなふうにとちょっと申し上げておきたい。

(安藤委員長)

ありがとうございます。これに対しては金田一さん、何かご意見ありますか。

(金田一副委員長)

ぜひ、そういうところはちゃんと書かなければいけないと思いますので、おっしゃるとおりだと思います。

先ほどの信州大学のほうの、確かにポリシーを見ますと、長野の自然から入っていき、とても美しい書き方をされているので、ああいう書き方ができるといいなと僕も実は思っております。ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

(安藤委員長)

グローバルマネジメントのほうでは、内部でした議論で、今回新しく起業家精神、最近ではアントレプレナーと言いますけども、やはり多様性を重んじるというか、それが全学の基本的なポリシーでして。その意味で世界に開かれると。世界にも出ていくことでもありますけども、世界から人材を呼び込むということもあまして、それが多様性から来るイノベーション。イノベーションの源泉というのはやはり起業家スピリットであろうということもあまして、自ら開拓する精神というか、自主性というか、独自性というか、起業家スピリットというものを非常に強調したカリキュラムに実際になっております。

例えば、海外プログラムとかですね。それもただ単に大学が準備するのではなくて、自らが決めて、自らが選択して、自らが成果を得るというふうな基本的に投げられていますので、ポリシーとしてはかなり、もちろん抽象的になりますけれども、現実のカリキュラムそのものとか、具体的な活動、プログラムにおいては、かなり特長のあることが考えられて、それを実践に移そうということで現在準備を進めております。

そういうとこだと思うのですが。千葉大学と比べてどうですか、上野先生。

(上野委員)

千葉大学もこの4月から国際教養学部というものができて、グローバル化に対応する。一方で、『地(知)の拠点整備事業』っていうか、地域のことも考えるということも両方やっていこうというふうにはしているのですが、基本はどちらかという研究大学として世界にどう関わっていくか、その中で地域のことをどう考えるかというのは悩みの種ですけど。

ちょっと質問なのですが、グローカルという言葉があります。それというのは、今は世界的に一般的な言葉になっているのですかね。もしなっているとすると、グローカルマネジメントなんていうのは、もしかすると世界初になっていいかなって一瞬思いました。

(安藤委員長)

あえて、グローバルよりもグローカルであると。今、上野先生がおっしゃったグローカルというのは、グローバルローカリゼーションとか、逆にしてローカルグローバリゼーションということも言われたりしているのですが、もともとコカ・コーラっていう会社のCEOが使い始めた言葉と言われてはいますが、今ではかなり一般的に、ビジネスの世界ではグローカルっていう言葉もよく使われますので、単にグローバルというよりも、地域に立脚したグローバルということは確かに言われています。そうですね。ありがとうございました。

他にどなたかありますでしょうか。山内先生、アドミッション・ポリシーについて、あるいはカリキュラム・ポリシーについて何かコメントをいただけませんか。

(山内委員)

今、ご指摘いただいたグローバルという言葉も、実は学部の名称としてどうかという議論がありました。今、委員長おっしゃったように、やはり地域っていうのは絶対的に前提であって、地域に根差してグローバルマネジメント、教育を展開していくと、あるいはそういう人材を輩出していくということでしたので、あえてグローバルマネジメントにしたと。

各ポリシーを見ていただくと、アドミッション・ポリシーですと2行目ですし、カリキュラム・ポリシーですと1行目にありますし、それからディプロマのところでも下から2行目ですかね、とにかく『グローバルな視野を持ち』というのは全てに入っております、基本的にそれが我々の目指すところである、こういう願いを込めて作ったものです。

(安藤委員長)

ありがとうございます。ということで、他にどなたかもし。ありがとうございます。それでは、今いただいたご意見等、もう一度、特に長野県をどう表現するかということも含めて、もう少し考えさせていただいて、継続的に考えていきたいと思えます。

それでは、次の議題に移らせていただきたいと思います。議題の(7)『入学者選抜方法について』ですけれども、これは金田一先生を中心に入学者選抜専門部会において継続して検討してまいりましたところでございます。まず事務局のほうから資料の説明のほうよろしくをお願いします。

(増田課長)

それでは資料7をお願いいたします。入学者選抜専門部会の議論を踏まえまして、概要案を提示するものとなります。今後、詳細についてはなお検討していくということも含めまして、この資料にもございますが、本委員会でお認めいただきました、あるいはお認めいただいたものにつきましては公表して、高等学校や高校生等に検討状況をお知らせしてまいりたいと考えております。

1の入試区分について、でございますけれども、記載のとおり一般選抜と学校長推薦選抜、自己推薦選抜の3つ、及び社会人、帰国生、私費留学生を対象といたしました特別選抜により実施するものとしてございます。一般選抜は、大学入試センター試験、個別学力検査の組み合わせ、学校長推薦選抜は高等学校長の推薦に基づくもの、自己推薦選抜は自己の推薦に基づくものということでございます。

それから、※印の所で記載してございますけれども、一般選抜の日程について、でございますが、国公立大学の分離・分割方式の前期日程、2月末頃に実施されておりますけれども、ここの活用をする、ここに持って来るということを基本といたしまして、中

期、または後期等の他の日程も加えて、複数の日程とすることについても、なお検討していこうという状況でございます。

2の入学定員、募集人員でございますけれども、入学定員、合計で240人とされており、学科ごとに入学定員が記してございますけれども、それぞれの選抜に振り分けるといふものでございます。特別選抜につきましては、若干名としていきたいというものであります。

それから、ここも※印の所でございますけれども、県内高校生の進学先といたしまして、一定程度、県内大学として確保していこうというために、いわゆる県民枠を設定しようというものであります。県民枠の設定に当たっては、学校長推薦選抜と自己推薦選抜というところを使って、県民枠を設定していく。全体で、入学定員240人の2割程度を県民枠としていきたいというものであります。もちろん、この他の一般的な選抜での県外の高校生、入学してくるわけでございますけれども、入学定員の2割程度は県民枠として選抜するというものであります。

3にまいります。一般選抜とございますけれども、それぞれの選抜における科目等を示したものであります。3の一般選抜、(1)総合マネジメント学部でございますけれども、2にございますように、総合マネジメント学部というのは、大学入試センターと個別学力検査によります一般選抜で130名を選抜するというものですが、この内容については、(1)記載のとおり、大学入試センター試験の教科といたしましては、国語、地歴・公民、数学、理科から3教科を選択します。そして、外国語、必修の英語と合わせまして4教科とするというものであります。なお、地歴・公民、数学、理科は科目の選択ができるというものであります。個別学力検査については、英語、数学、この個別学力検査の数学のほうは、数I、数A、および数II、数Bを対象にするというものでございますけれども、それから小論文、面接、全てやるというところまでまだ詰まっているわけではなくて、この中から組み合わせで実施するというところで、さらに検討してまいります。

2ページをお願いいたします。健康発達学部食健康学科について、でございます。一般選抜より21名を選抜するものであります。記載のとおり、国語、数学、理科、それから英語と合わせた4教科。数学、理科については科目選択枠を設けるというものであります。個別学力検査は小論文と面接によることを中心に検討を詰めてはいます。

3の健康発達学部こども学科について、でございますけれども、25名を一般選抜により選抜いたします。大学入試センター試験につきましては、国語、地歴・公民、数学、理科、英語の5教科といたします。地歴・公民、数学、理科は科目選択枠を設けるというものであります。個別学力検査は小論文、面接を中心に実施するというところで検討してまいります。

それから、※印の所、これも表現が分かりづらい所があって大変恐縮なのですが、今申し上げましたそれぞれの科目につきましては、基本的には分離・分割の前期試

験を想定した際の科目でございまして、それ以外の日程で実施する場合には、今後の検討によりましては、今申し上げた教科・科目が異なってくる場合があるというものであります。

また先ほど申しましたが、グローバルマネジメント学科となる学科のほうでは、前期試験において面接を行うか等、個別学力検査については、学科ごとにさらに検討を行っていくという状況であります。

次に4の学校長推薦選抜であります。総合マネジメント学部につきましては、30人を学校長推薦選抜により選抜いたすものなのですが、選抜方法といたしましては、小論文と面接、それから出願要件の欄に記載してございますけれども、高等学校からの調査書、それから志望理由書も含めて評価をしていくというものであります。

実施時期といたしましては、初年度の平成29年においては、初年度は認可申請が下りるタイミングが8月以降というようなことが見込まれることもございますので、初年度においては、平成29年度においては11月とする予定でございます。

出願要件等に記載のとおりでございますけれども、高等学校、中等教育学校の後期課程を含むものでございますけれども、を卒業した者、または平成30年3月末に卒業見込みの者といたしまして、グローバルマネジメント学部への推薦として1校につき1名を推薦いただくことができるとするものであります。また、その際に調査書全体の評定平均値4.0以上を求めていくというものであります。大学入試センター試験は課さないでございますとか、調査書、志望理由書については先ほど申したように評価に含める。それから最後、英語につきましては、外部試験を活用いたしまして、実用英語技能検定の2級以上ですとか、TOEICの550点以上等を持っている者につきましては加点をしていくとしてございます。加点の具体的方法につきましては、なお検討を詰めまして、改めて公表いたします

3ページをお願いいたします。健康発達学部食健康学科について、でございます。食健康学科では学校長選抜により9人を選抜するものでございます。総合マネジメント学部・学科と同様に、選抜方法は小論文、面接によることとし、高等学校からの調査書、志望理由書も含めて評価するというものであります。実施時期、それから出願要件等は記載の通りでございますけれども、グローバルマネジメント学部・学科と違っている点について申しますと、最初のポツなのですが、長野県内の高等学校を卒業した者、または長野県内の高等学校を卒業見込みの者としていらっしゃるところでございまして、これはこのまま先ほど申しました県内枠となります。

それから3つ目の点の所で、高等学校において化学および生物を履修していることを求めます。調査書の評定平均値4.0以上、それから入試センター試験は課さないこと、外部試験の英語の試験を加点要素にすること等につきましては、総合マネジメント学部と同様でございます。

健康発達学部のこども学科についてですけれども、学校長推薦選抜により12人を選

抜するものであります。他の学科と同様、小論文、面接による選抜、それから高等学校からの調査書、志望書も含めての評価というものでございます。実施時期、出願要件等は記載のとおりでございますけれども、ここも食健康と同様、グローバルマネジメント学部と違まして、長野県内の高等学校を卒業した者、または長野県内の高等学校を卒業見込みの者としているものであります。評定平均値 4.0 以上を求めること等につきましては、他学科と同様でございます。

最後に 5 の自己推薦選抜についてです。これについては、なお議論を詰めていく必要があるということで、本当に概要でございますけれども、グローバルマネジメント学部については自己推薦で 10 人を選抜するとしているわけなのですが、選抜方法は小論文及び面接、実施時期は初年度の平成 29 年度においては 12 月を予定しております。出願要件等についてはなお検討して、アドミッション・ポリシーに基づきまして、学業成績だけではなく、意欲あふれる学生を選抜するということで、議論の方向が出てございますけれども、その方法につきまして、あるいは出願要件等につきましては、なお検討してまいりますものでございます。

それから、グローバルマネジメント学部・学科につきましては、先ほど申しました学校長推薦選抜を現時点では県内高校からに限定しないこととしてございます。その上で学校長推薦、自己推薦選抜のうち一定程度を県内高校生とすることによりまして、県民枠としていこうというものでございます。

それから健康発達学部食健康学科については、自己推薦選抜は実施しない予定でございます。子ども学科につきましては自己推薦で 3 人を選抜するものであります。選抜方法は面接といたしまして、実施時期は、29 年度は 12 月を予定、出願要件については、マネジメント学部と同様になお検討してまいりたいと考えているところです。

以上、現時点での入学者選抜の概要についてでございます。なお検討していくと申し上げたところ、あるいは今後検討と書いてあること等、詳細について検討を進めまして、6 月頃にはより詳細なものを決定し、公表してまいりたいと考えているところでございます。説明は以上でございます。よろしく願いいたします。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。今ご説明いただいた分は、専門部会で先生方がかなり長期にわたって議論された結果でございますけれども、もし補足的なコメントがあればいただきたいと思えます。山内さん、何かありますか。

(山内委員)

グローバルマネジメント学部につきましては、今ご説明していただいたとおりなのですが、我々いろんなことを議論しましたけれども、一つはより良い学生に来ていただきたい、それからさっきありましたアドミッション・ポリシーに合致した学生に来て

ていただきたいということがあります。そのためにつきましては、もう一方で、大学の間でいろいろな競争がございますので、我々と競合するような大学、あるいは競合するであろう大学、そういうところの入試の実態を踏まえまして、例えば一般選抜、それから学校長推薦の選抜、自己推薦選抜、現在の構成でありますとか、入試の科目、そういったものも、今申し上げたように、良い方を、良い学生を採りたいという一方で、いろいろな調整の中で決めたということでもあります。

もう一つは学校長推薦ですけれども、健康発達学部、食健康学科、こども学科の方は県内の高校推薦ということだったのですけれども、我々の方は、今受験生のいろいろなことを総合すると、もう少し広いところから推薦いただきたいということで、県内の高校に限らないといたしました。全体で入学者2割程度の県内枠ということを前提としておりますので、その中で先ほどご説明ありましたように、県内枠と言われるものを確保するというを考えております。これは言い忘れましたが、自己推薦を含めてということでもあります。

その結果、出てきたのがこういうことでございますけれども、日程についてももう少し文科省とすり合わせをする必要があるということがございますので、これは複数日程を設けて、今申し上げたように他大学の動向を見つつ、決めていきたいということです。以上でございます。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それでは、笠原先生、食健康学科について。

(笠原委員)

食健康学科では、入り口は理系、それから出口は文系の資質を備えておかなければならないという非常に複雑な部分があるのですけれども、一般選抜につきましてはそういったことを考慮したということと、全学的にグローバルに発信のできる力を持つということで国語、英語といったところをきちんと押さえるということから科目を設定しています。

もともとの人数、定員が30人と少ないものですから、学校長推薦の選抜は県内の高等学校からということで3割の人員を選抜するというようにしております。残念ながら自己推薦選抜につきましては、管理栄養士の国家試験に合格するという非常に大きなバリアーがありますので、今回は自己推薦選抜については人数が少ないことと合わせて、食健康学科では設けないということにさせていただきました。以上です。

(安藤委員長)

ありがとうございます。太田先生、こども学科について。

(太田委員)

こども学科は、一般選抜の方は大学入試センター試験で、広くバランスのいい学力という観点から、科目を少し多くしてあります。それから、学校長推薦の方は、幼稚園教諭や保育士ということ想定すると、長野県内からの進学者は相当数いると思いますので、長野県内の高校からの推薦で3割を採りたいと。それから自己推薦では、人間的魅力があるというか、そういう人を採りたいと思っているのですけれども、面接と書いてありますけれども、事前課題や小論文等をうまく含めていきたいということで今後検討していきたいと考えています。なお、一般選抜の個別学力検査で小論文と面接を中心にと書いてあるのですけれども、基本的には小論文でというふうに考えているところです。以上です。

(安藤委員長)

ありがとうございました。金田一先生は何かありますか。

(金田一副委員長)

私の方からはお詫びというか、入学者選抜については議論することが大変多くて、本当は今日できる限り公表できればいいなと思っていたのですけれども、残念ながら一部公表できないところもございます。これについてはできるだけ早く公表して、高校生や保護者の方々に、また高校にも周知するようにいたしますので、ぜひその点をご理解いただきたいと思います。

(安藤委員長)

すいません、公表はここにある6月頃なのですか。それともすぐ公表するのですか。

(金田一副委員長)

先ほど増田課長が言いましたので、6月には是非できる限り具体的なものを、例えば一般選抜の個別試験の日程とか、自己推薦の出願要件その他、英語の外部テストの評価の仕方その他、詰めていかなければならないことがありますので、それは6月には発表させていただきませうけれども。

本当は今日、できるだけ多くできればよかったですけれども、その点は大変申し訳なかったと思います。推薦というのは2年前には公表しなければいけないということがあったかと思いますが、その点も踏まえまして、いろいろ考えていたのですが、なかなか議論がうまく、結論が出なかった点はどうかご容赦願いたいと思います。

もう一つは、これから県内の高校回りをさせていただきたいと思っております。ぜひ進路指導の先生方と話し合いを持つような機会をこれから多く取りたいと考えております。以上でございます。

(安藤委員長)

ありがとうございます。内堀先生、高等学校の方から見てどうですか。

(内堀委員)

入学者選抜の方法はいろいろ考え方があると思いますので、これまでも、安藤委員長がおっしゃったようにいろんな意見が出る中でこういうふうに取りまとめられたと思いますので、基本的にはそういうところを踏まえてこの結論に至っているというふうに理解していますが、ちょっと質問をさせていただいてもよろしいでしょうか。

(安藤委員長)

はい、もちろん。

(内堀委員)

まず一般選抜ですけれども、マネジメント学部でセンター試験の英語が必修というか必ず入っていて、それ以外の4教科から3つ選ぶ形という理解なのですが、つまり数学を選ばない選択もあるというふうに理解しているのですが、まずそれでいいのかということと、その場合、個別学力検査で、今度は英語、数学っていうふうになっていますが、どんなふうに整合性を取るのか、どちらかを選択するかそういうことなのかっていうところが、見させていただいて思ったところです。

それから、健康発達学部の2学科については、国家試験を前提に、教科が組みまれていると思うのですが、そこが個別学力検査のところは小論、面接になっていて、むしろマネジメント学部のほうが国家試験っていうのをあまり想定してない、もちろん公務員になる人は想定しているのかもしれませんが、というふうに理解しているのですが、それがむしろ個別学力検査に教科が入っているっていうところはどんなことなのかなっていうふうに思った点があります。

あと、学校長推薦、それから自己推薦の部分で、例えば小論文というのがどんなイメージで想定されているのか。例えばA0なんかの中には、大学の先生がレクチャーをして、そのレクチャーをしっかり聞き取って意味を理解して、自分で意見をまとめてというような、それは小論文とは言わないと思いますけども、そういう形の論述を採っている所もあるのですが、あるいは何かを読んでまとめて自分の意見を言うとか、あるいは何かタイトルがあってそれについて書くとか、いろんなパターンがあると思うのですが、詰まってないのであれば詰まってないでいいですけども、それがちょっと、どんなことを想定されているのかと思いました。

それによって、求める力が大分、同じ小論文でも違ってくる可能性があると思っていると、あと先ほどとも関連しますけれども、学校長推薦とか自己推薦の中で、国

家試験が想定されている2学科について小論文、面接というようなところで、あとは調査書、基本的には調査書だと思うのですけれども、っていうような形は大丈夫ですか。

それから、一つ要望を言わせていただければ、2ページ目の真ん中のちょっと下の所に、複数日程を設ける場合には云々とありますけれども、ここで以前から私申し上げているような、少し尖ったというか、多様性のあるというか、例えば前期と中期、後期という場合に、同じようなパターンでないというようなところも、教科の選択ですけれどもあるのかなと思いました。基本的には詰めに詰められた結論だと思いますけれども、ちょっと疑問に思ったことがありましたので質問させていただきました。

(安藤委員長)

金田一先生、お答えできる範囲で。

(金田一副委員長)

まさに今、内堀先生がおっしゃったことが今の議論の中心に実はございます。そういうことで、実はきちっと細かいところを詰めることができない状況に今あります。

最初の点ですけれども、センター試験には3科目及び英語というふうに書かれています。これは数学を取らないというやり方も当然あり得ます。その上で、個別学力検査の方では英語と数学又は小論文という形を取っております。これは山内先生に答えていただいた方がよろしいですか。

(山内委員)

アドミッション・ポリシーに従って多様な学生を採りたいというのがありますけれども、おっしゃるように数学なしでもできるという形になっています。例えば、東京に行っている私立文系の学生で優秀な子いますね。ただ我々としてはマネジメントを踏まえた現状での科目の構成になっているということでもあります。

(安藤委員長)

笠原先生、ありますか。

(笠原委員)

小論文に関しましては、まだ検討中ということで決まったことはないのですが、先ほどのお話のように講義をしてまとめるということではなくて、紙ベースで提示された文章に対してどういうふうにきちんとその内容を的確に捉えられるか、そしてそれに対してどういう考えを子どもたちが持つかというようなところを主にしていきたいと思っております。読み取り力と自己表現というところ、それと、今ちょっとどうだろうと思っていることは、この小論文の中で簡単な英語の読解であるとか、そういったことも上

手に含められた問題作りができないだろうかということを検討しているところです。

それから面接につきましても、管理栄養士等々いろいろな職務を考えますに当たっては、人を対象としたものでありますので、できるだけコミュニケーション能力の高い学生を取りたいという思いがありますので、丁寧に面接もやっていきたいと考えております。まだまだこれからの検討課題です。よろしくお願いします。

(安藤委員長)

ありがとうございます。他にどなたか。濱田先生、何かありますか。

(濱田委員)

恐らく受験生が一番知りたいのは配点じゃないかと、私が受験生だと思うのですが、いわゆる個別学力と入試センターの配点もそうですし、大学入試センター試験の中の科目の配点もそうだと思うのですが、配点がかなり大きな要素を占めているかと思うのです。その辺の検討状況っていうのはどうなのでしょう。

(金田一副委員長)

数字は一応、置いてはあるのですけれども、まだそこが話しできる状況にないということでございます。すいません、それも6月になってしまうのですけれども、これも学部ごとに違うということがございます。かなり細かいことになりますけど、ぜひ6月には公表したいということでございます。

(濱田委員)

恐らく配点を設定したときに、何でその配点だという説明を必ず求められるのですね。我々の所も、例えば理系ですとこの配点にして理科が強い学生を取りたいとかという、どういう人を取りたいかっていう理由付けを必ずしていますので、配点には必ずそれがくっ付いていると思いますので、そこも合わせて是非検討していただいて。

一般論で言いますと、個別学力の配点を低く抑え過ぎるとなかなか倍率は上がらないというのが一般論でして、要するにセンター入試だけで決まってしまうイメージを受験生に与えると倍率は上がらないというのが一般的な、これはあくまで一般論なので、校長先生は違うと思っているかも分からないですけど、我々の読みとしてはそうなので、そうするとその辺のバランスで倍率にも影響が出てくると思いますので、その辺はよく検討されるのがいいのかと。

それと、中期日程というのが多分、大阪府立大ですとか兵庫県立大とかがやってらっしゃるやり方だと思うのですが、我々国立大学はそういうのをやっていないので分からないのですが、あの影響を、国立大学の後期日程は結構受けるのですね。あそことレベルが同じぐらいになると、どちらに行くのかというのが毎年のように実は変わった

りする。逆のケースが多分大阪府立大とか兵庫県立大の、この人が合格したときに来るかどうかというあれがあると思いますので、その辺りは実際、大阪府立大とか兵庫県立大に一度行って見て聞いてみるのがいいのではないかなど。我々国立大学なので、あちらの様子は分からないのですね。我々の方にはすごい影響があるというのは見ていまして、たまに両方合格したときに向こうに行ってしまうと、我々の所で定員が割れるようなときもあるので、多分逆もまたあるのかなど我々は実は想像しておりますので、もし中期日程とかをやられるなら、実際のその辺の調査はいいのかなどちょっと思いました。

(金田一副委員長)

ありがとうございます。

(山内委員)

よろしいですか。

(安藤委員長)

どうぞ。

(山内委員)

マネジメント学部の方では、今おっしゃった日程の件も配点の件もかなり議論をしておりますけれども、まず配点の方から言いますと、例えば他大学で公立大学を中心に同じような種類の学部についてのいろいろな情報を集めて、決定するまで今一つその情報が十分じゃないところがありまして、今おっしゃったように日程も含めて配点をどうするかシミュレーションや、あるいは今大学でよくやるのが、例えば予備校が持っている情報なんかもインプットしてまとめていく必要もあると思いますが、その辺のことに ついてまだ情報が不十分です。ただ大体の議論はしております。

今、濱田先生がおっしゃったようなことを少し参考にさせていただいて詰めたいというふうに思っております。特に日程についてはもちろん、いろいろなことを考えておりますけど、中期日程の影響については我々も少し思い至らなかったこともありますので、参考にさせていただきたいと思っております。どうもありがとうございます。

(安藤委員長)

私も3か所でやった説明会で、今の高校っていうのは1年のときにもう文科系とか理系系とかコースを決めてしまって、それによって勉強する科目数が違ってくということと少し驚いたのですが、そういう点ではできるだけ早く発表しないと高校生にとってなかなか準備しにくい、コースの選択が難しいみたいな話を聞きました。その辺は、うちの大学は理系、文系がないのだということを標榜しているのですが、そ

れはどうか、内堀先生の方から見れば。

(内堀委員)

確かに、多くの進学校といわれるようなところでは、1年の夏か秋ぐらいからもう次年度の文系・理系というのを決める話が始まりますね。学校によって文系・理系だけを決めておいて3年でもう一回さらに細かく分ける学校もありますし、大体2年で分けたときのままいく学校もあります。そういう点では早く分かった方が文系・理系の差というのは分かるのですが、ただ同時に学習指導要領に共通の科目がありまして、必ず取らなければいけない科目っていうのがあるのですね。そこからどれだけ踏み込むかによって文系・理系にどれだけ影響を受けるかっていうこともあるのです。

センター試験も、例えば数ⅡBを課す、数Ⅲを課すのかとか、地歴・公民とか理科の科目を、基礎じゃない科目をいくつか課すのかとか、しかもどの程度のレベルを求めるのかとか、さまざまな要素がからんでくるので、それによって、あまり文系・理系の選択は大きく、例えば英語はどちらに行ってもやりますし、ということもありますので、どのぐらいの科目を設定するかとか、どのレベルまで設定するかということで文系・理系の影響が出る可能性があると考えております。

(安藤委員長)

はい。どうもありがとうございます。そういう観点から言うと、この6月というのは最後の、一番遅いところですね。ぜひそこは必ず詳細が発表できるようにお願いしたいと思います。

他にどなたかもし、この件について議論があれば。ありがとうございました。それでは、いずれにしても公表は6月ということですので、この後も議論を続けていただいて、その頃までにははっきりした決定をしていただくということでお願いいたします。

(増田課長)

委員長、すいません。今ご指摘がありました配点とかそういったものは6月に公表ということで進めてまいりたいと思うのですが、今提示させていただきました資料、科目は何か必要か、ということまでは、ここでご了解を頂戴できれば、今日にも公表してまいりたいと思っているところであります。そうしますと高校生もどのあたりの科目としてあるのかということまでは情報が分かるということかと思えます。

(安藤委員長)

分かりました。私もその方がいいと思います。できるだけ早く発表できるものはしてしまうと。ありがとうございます。

それでは、次の議題に移らせていただきたいと思います。議題の(8)総合教育科目

(案)について、ご説明を金田一先生の方からお願いいたします。

(金田一副委員長)

分かりました。新県立大学では専門を大変重要視するのですけれども、総合教育科目も重視しようという、そういう考え方でできております。しかし新大学は小規模な大学ですので、いわゆる教養教育といって幅広くというときに、科目をたくさん置くということはできません。1000科目ぐらい置いている所もございます。そういうことから言いますと、かなり少ない科目になってしまいます。

そこで戦略としては、何を教えるかではなく、どのように教えるかという戦略で、総合教育科目を考えていこうということでございます。

つまり、一般には総合教育科目というのはいわゆる般教と呼ばれておまして、いわゆる一番マスプロ教育に近い教育がされていたのが総合教育科目になります。その欠点を克服するために、ある程度少人数の科目を増やす、例えばゼミのような科目を増やすということが一つあります。

もう一つは、ディスカッションを授業の中に取り入れるという形を取ります。やはり一方通行の授業ではなく、学生も発言する。そういう中で知識が学生にとっても活用できる知識となるという点の一つ大事な点としてあります。さらにその知識がディスカッションをすることによって、一つの科目を超えて他の学問分野と知識が横につながっていくということが可能かと思えます。そういうことで、どのように教えるかというところで総合教育科目を考えていきたいというのがこちらからの戦略としてあります。

資料の8ですけれども、1番の基本的な考え方は私が書かせていただきました。ここでは長野県らしいことを書いておりますけれども、こういうふうに書かせていただきました。特色につきましては、今申し上げたとおりでございます。あとは具体的に、その下の方の2番の外国語教育から個別の話をさせていただきたいと思えます。

まず2番の外国語教育ですけれども、これについては現在9名の専任の先生が新大学に入る予定でございます。その9名の先生方が今、カリキュラムというのですか、英語の1年次から2年次にかけての集中的なカリキュラムを議論して海外プログラムにうまくつなげようという形でやっております。恐らく新大学の中で一番検討が進んでいるところがこの外国語教育になっているかと思えます。英語をいわゆる共通語として考えるということになります。もちろん、それ以外の第2外国語といわれます諸外国語についてもいくつかドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語を設けるといった形を取らせていただきます。そういう形でまず外国語教育を行うということがあります。それから、海外から日本に来る留学生のためにも、日本語教育もできる先生を用意しておりますので、その辺も是非、うまく設置していきたいというふうに考えております。

次の2ページ目に3番としてグローバル教養ゼミというのがあります。これはあまり一般の大学にはない科目であろうと思えます。これはどういうものかと言いますと、せ

っかく 15 名、英語の先生が 9 名、そして総合教育の先生が 6 名入っておりまして 15 名の先生がいわゆる専門以外の科目を教える先生として専任としています。その先生にむしろ 3、4 年の科目を 3、4 年のときに全部をやってもらおうということを考えております。

これはどうしてそういうことをさせるかという、一つは先生方にとっても非常にやりがいが出てくるという点でいいということと、もう一つは、これからの時代は一つの専門だけで生きていくのではなく、こういった流動的で複雑化した時代を生きていくためには、一つの専門ではなく、副専攻としてもう一つあった方が実はいいのではないかという考え方が根底にあります。

もちろん、副専攻としてかなり大きな教え方ができるかというとなかなか難しいことは承知しておりますけれども、ただ一つの専門だけを勉強する以外に、学生の方にも別の科目もやってみたい、別の分野の勉強もしてみたいという学生がいた場合に、そういう人たちの窓口になるような科目としてこのグローバル教養ゼミというものを設けさせていただきました。あまり他大学にはない形ですけど、今、副専攻というのはさまざまな大学で行っているかと思えます。それに近いものだというイメージで捉えていただければと思います。

それから 4 番目の基盤科目に移ります。ここでは 1 番に発信力セミナーというのがございます。これは、いわゆる日本語をきちんと理解しておけということです。使えるようにしておけという、それがこの発信力セミナーで、できれば毎回、短い文章を書かせて、それを添削して返すというような、かなり先生にとってはハードですけども、人数も 15 人以内のかなり少ない人数でこういった演習科目を設けようということです。

日本語で書くこと、それから日本語でプレゼンをすること、それを中心に、ここでは演習の授業として考えていこうと思っております。やはり日本語ができないということで英語ができなくなってしまう。または日本語ができないということで、いわゆる学問の土台である母語がちゃんと話せないということは困りますので、これはきちんとやっていかなければいけないということで、1 年次にこの科目を設けた次第でございます。

2 番目がデザイン思考という科目です。これは割と新しい今風の科目になりますけれども、イノベーションを創出するスキルや何かを磨くということになるかと思えます。この場合のデザインは決して図式に表わすとか、そういう 2 次元のデザインではなく、むしろクリエイティブ、物を創作するという意味のデザインになります。物を作っていくという、そういう思考のためのプロセスを、これも恐らく実例に即した演習形式になるかと思えますけれども、そういった形の授業をしてみようというのが 2 番目のデザイン思考でございます。

3 番目のグローバルスタディーズというのは、これは 2 年次に留学をいたしますけれども、その直前に必ず取る科目ということになります。やはり留学先の地域文化、歴史や何かも知らなければいけない。翻って、日本の事情もちゃんと文化や歴史を知ってお

く必要がある。そういったことを含めまして、このグローバルスタディーズで教えていこうという必修科目でございます。

4番は情報教育となります。この情報教育は大変難しい科目になります。難しいというのは、20年前でしたらノートパソコンを学生が持っていたのですが、今はノートパソコン持っている学生がいなくて、みんなスマホになってしまう。そうすると、10年後はまた違った時代が来る可能性があります。そういう新しい時代に即してどういった情報を教えていったらいいかというのはかなり難しい問題を含んでいるかと思えます。ここにはコンピュータリテラシー等書きましたけれども、こういった教育をかなりきちっと議論して決めていかなければならないだろうというふうに思っております。これについては今、検討中でございますけれども、専任の先生いらっしゃいますので、その方と今、合わせてどういう科目にしていくかを構築中ということでございます。これは教員にとっても重要で、CALLとかLMSのようなものを先生方がちゃんと使えるのかどうかといったようなことも絡んでくるかと思っております。

最後は信州学です。信州学は、これは今、いい先生を上條先生から紹介していただきました。信州学というのは今、長野県の高校でも学ぶように、始まったという話を聞いております。そういうところの差別化を図っていかなければならないだろうと思えます。それから、あまり楽勝科目になるようなことのないようにしなければいけないということもございます。私の方からは一応、3つ注文を付けました。一つは、座学ではなくフィールドワークをきちんとやってほしいということを行いました。二つ目は、フィールドワークをやっている所で、地元の人とコミュニケーションをしっかりとっていただきたい。コミュニケーションをちゃんとできるだけ取るということが重要ではないかと思えます。ただ行って見学して帰ってきたというのでは困りますので、そういったコミュニケーションを取るということ。それから3番目は、グループワークというのですか、問題をそこから発見し、そして問題を設定してほしいということです。それをレポートにして提出するということになります。これは解決まで行けばいいんですけども、物事というのは、あまり解決までやれと言うと、急いで解決のほうに気持ちが行ってしまいますので、むしろきちんと設定するということが解決の糸口になるというふうに考えれば、むしろ設定することのほうが大事ではないかと考えております。

このことを言いましたところ、その担当の先生の方からは、逆に、ぜひ長野県が好きになるような授業にしたいということと、長野県の各地を1年の間に何か所か回っていくという形を取るのであれば、そういったものがきちんと蓄積した形で残る、そしてそれが報告書として、レポートの形ですけれども、残ったら、それは結局、長野県とうちの新県立大学が、そこに長野県の各地とのネットワークができる状況が生まれるかと思えます。そういったものが大変重要ではないかと考えております。

そうやって信州学を、ただ1年間で考えるのではなく、これから蓄積していくことによって、新県立大学と長野県とのつながりを深めていこうという考えでこの信州学をや

っていったらいいのではないかと考えております。

私の方からは以上の説明で終わらせていただきます。

(安藤委員長)

ありがとうございました。今の金田一先生の説明に対してどなたか質問とかご意見とかあればいただきたいと思います。上條先生、どうですか。

(上條委員)

総合教育科目について、きちんと考えていくというのは非常に大事で、これはいいことだと思いますが、問題は、今度の大学のもう一つの特徴は専門教育科目ですね。これと総合教育科目をどのように結び付けるのか。それが、例えば秋田県の国際教養大学との違いだと思うのですね。

ですから、これと合わせて専門教育科目について、これは学部・学科によって違うと思うのですけれども、その方針を合わせて立てる必要があるのではないかと。特にグローバルマネジメントの方については、キャリア教育との関係も一つやはりきちんと明示した方がいいのではないかと。

今、金田一先生の話で、複数の専門領域も視野に入れてというお話もございましたけれども、これは時間割の作成その他に大変難しい点もあるかと思っておりますけれども、同時にやっぱり専門教育科目群、あるいはキャリア教育、キャリア教育というのは健康発達学部の方はかなり明瞭ですけれども、グローバルマネジメントの方は必ずしもまだ見えないのじゃないかという感じが私はしておりますので、そこを合わせて考えて、その組み合わせも考えていく。そういうことが必要ではないかと私は思います。

(安藤委員長)

ありがとうございます。山内先生、何かありますか。

(山内委員)

大変重要なご指摘いただきましてありがとうございます。グローバルマネジメントの方で、金田一先生がご提案の科目群についてどういうふうに扱うか議論しておりまして、おっしゃるとおり、確かにキャリア教育との関係ですね。それから我々の専門性と整合するような形で少し考えたいと思います。どうもありがとうございます。

(安藤委員長)

上野先生、何かありますか。

(上野委員)

信州学の所、非常にいいなというふうに思ったのですけれど。報告書にまとめられるという。千葉大の例を挙げて恐縮なのですが、千葉大では「千葉学ブックレット」というのを千葉日報社と協力して作ってしまっていて、そんなすごい本ではないのですけれど、大学のいろんな教員が専門性と千葉ということを対象にして、もう 50 何冊できていると思うのです。報告書というよりは、長野県民の方々に広く読んでもらえるような書籍の形にして、新聞社とかいろいろ協力していただいてやるといいのではないかと思いました。

(金田一副委員長)

ありがとうございます。

(安藤委員長)

ありがとうございました。先ほどの前の議論の各学科のカリキュラムと総合教育科目につきましては、これからも教育課程・教員選考専門部会で引き続き議論を続けていただくということで、大学設置認可申請に向けまして、これは 10 月なのですけども、さらに万全の準備を尽くしていただきたいと思います。ということで、今日はいったんこれで議論を打ち切らせていただきます。

それでは、次の議題に移らせていただきますけれども、(9) 学生納付金の設定について。これについては前々回にもご説明させていただきましたけれども、この考え方につきまして、事務局からその後変更点等あればご説明いただきたいと思います。

(増田課長)

昨年 9 月 14 日の本委員会におきまして、委員会としての学生納付金についての考え方、および設定例をお示しいただきました。資料 9 にお示ししてあるもので当委員会の考え方を示していただいたのですけれども、その後、県といたしましても資料にございますように当委員会にお決めいただいたものと同様の考え方で進めてまいりたい、具体的には平成 28 年度ないし 29 年度には入学検定料等について、この考え方に添って必要な条例案を提出し、平成 30 年度には新大学法人に対し授業料等の設定に関する認可を行っていくといったようなことを前提といたしまして、今後文部科学省への認可申請あるいは広報等を実施していくとしたところがございます。委員会に検討いただきまして、県としてもこの方針で進めていくと決定したということをご報告させていただきます。どうもありがとうございました。

(安藤委員長)

ありがとうございました。今の提示されました考え方をベースに広報活動等を積極的にやっていくということでございます。

それでは、次の議題に移らせていただきたいと思います。専任教員の選考につきまして、現在の状況についてのご説明をお願いします。

(増田課長)

資料 10 をお願いいたします。現在の専任教員の選考状況についてご報告申し上げますのでございます。1、基本方針として記載しておりますとおり、専任教員の総数 79 名ということで見えてございます。ただ現在、カリキュラム、あるいは選考されつつある方との関係等を勘案いたしますと、これより少なめな 70 数名でまずはスタートできるのではないかと考えているところでございます。

2の選考状況でございますけれども、記載のとおり、県短期大学から移行していただく教員が 22 名、専門部会の委員等からの推薦による選考で 18 名、それから第 1 回公募で 16 名等、合計 56 名、全体の 8 割弱ぐらいになるかと思っておりますけれども、予定者が選考されているところでございます。

それから、2 ページに若干記載してございますが、現在、食健康学科、マネジメント学科に関して、9 名の候補者について公募を行い選考中でございます。

何分、だんだん期限が迫ってきていることとございますけれども、設置審に向けて全員の選考をこれから正確に進めてまいりたいと考えているところでございます。よろしくお願いいたします。

(安藤委員長)

ということで、選考状況のご説明がありましたけれども、一方で各学部の質の確保の方はどうでしょうか。山内先生。

(山内委員)

グローバルマネジメント学部の方は、コアになる先生方をまず固めていて、一般公募はかなりの倍率です。私としては、まだ完全に決まったわけではございませんけれども、非常に優秀な、と言いますか、有能な先生方にお集まりいただいたと考えています。以上です。

(安藤委員長)

ありがとうございます。笠原先生、どうですか。

(笠原委員)

食健康学科の方も推薦と公募という 2 段階で教員の採用方法を決めさせていただいておりますが、非常に特殊な分野でございますので、なかなか科目適合性と研究業績、それから実務経験等の兼ね合いが非常に難しいところでございますが、現時点では非常に

ユニークな優秀な先生方を採用候補として挙げさせていただいております。もう少し、あと3名残っておりますが、鋭意、対象の方を見つけてまいりたいと思っております。

(安藤委員長)

ありがとうございます。太田先生、何かありますか。

(太田委員)

こども学科でも推薦と公募で予定15名中12名が決まりましたのであと3名ということで、優秀な方々が集まっています。

(安藤委員長)

ありがとうございます。ということで、10月の設置審に向けて鋭意、教員の確保をよろしく願いいたします。私もマネジメント学部の方ではいろいろと手伝っておりますので、質の方は本当に驚くような素晴らしい、幅広い範囲から応募がありまして、むしろ驚いているような状況ですので、やはりこれも長野県の大学ということで、それも大いに魅力を与えているのではないかと感じております。

それから、いよいよ、報告の4ですけれども、議事の(11)施設設備の準備状況について、事務局の方からお願いします。

(事務局)

準備課施設班の下田です。報告させていただきます。一昨年の平成26年に新県立大学の基本構想をもとに施設設備専門部会等で検討された施設設備基本方針を踏まえて、公募時に設計者に求めた基本的視点につきましては、資料に示されてある『「グローバルな視野でイノベーションを創出し地域のリーダーとなる人材育成」実現のため、学生の主体的な学び、多様な交流を施設面から積極的に支援する』というものでした。

この方針に基づいて、基本設計、実施設計を昨年まとめたところです。設計に反映されたキャンパスの特徴につきましては、『キャンパス全体が学びの空間』『多様な活動の「見える化」』等、これも資料に示されたとおりでございます。

三輪キャンパスの工事発注は、建築工事を含む3社の工事契約について、本日県議会の議決をいただいたところで、他の2社を含め3月中に契約をし、4月に本格的に着手する予定です。

後町キャンパスにつきましては、裏に全体のスケジュールもございますが、平成28年7月初旬の工事着手、29年12月の完成を予定しています。校舎につきましても、平成29年11月の完成を予定し、平成30年4月の開学前までに備品等も含め施設を整備する予定でございます。

また、報告でございますが、国土交通省サステナブル建築物等先導事業において、詳

しいところは省きますが、新県立大学のキャンパスにおける環境への提案が、信州の気候と風土を生かしたサステナブルキャンパスの実現や、地方都市における取り組みとして今後の波及、普及につながる等の点で評価されて採択を受けたところでございます。

先月2月に開催された17回のシンポジウムにおいて金田一学長予定者に、国土交通省はじめ企業・団体に向けてプロジェクトを紹介していただいたところです。

今後、環境も含め具体的な工事に入っていきますので、教員の方々や各関係者の方々、施工者、設計者も含めて、一致団結してより良い建物を造っていく予定でございます。以上簡単でございますが、報告とさせていただきます。

(安藤委員長)

ありがとうございました。それでは、今まで設備等につきまして大変ご尽力賜った上野先生、何か。最初のイメージとでき上がりつつあるイメージではどうお変わりになっておられるか。

(上野委員)

設計図書に関しては、これまで見させていただいておりますので、それをどうやって予算内に収め、業者さんを決めるかということにご関係の皆さんも大変苦勞されたと思います。改めて敬意を表わしたいと思います。

これから着工するにあたって、今、事務局の方から関係者一致団結して当たっていきたいというお話がございましたけども、それが本当に一番大事だと思いますし、また具体的になってくると結構、喧々諤々になって大変なことになることがまま多い。

あるときは、運営の仕方によって建築のあり方を多少見直さなければいけないとか、あるいは建築的な、あるいは施設の管理的な面から大学運営のあり方を見直さなければいけないとか、いくつかのやり方がきっとあると思うのですね。

そういう場面に、良く変わることを恐れずに、これが決まっているからそういうことは駄目だというよりは、やっぱり学生たち、信州、長野の大学の学生たちにいい大学を造るということを一番の目的にして、ある程度柔軟に、建設的な方向で議論を進めていただければと思います。以上でございます。

(安藤委員長)

ありがとうございます。まさに今、上野先生が言われたスピリットで、本当により良い大学、より良いキャンパスを造るという方向でいきたいと思います。

それでは、山浦委員としては何かございますか。

(山浦委員)

こども学科と食健康の方は目的がはっきりしているので、これは問題ないのではない

かと思うのですが、グローバル学科の方は、産業界、理科系できちんとした電気だとか機械だとかというのは、長野県はある程度、工業立国みたいなところがありますので、それはそれで東京や信大の工学部がありますが、文科系といたしますか、そちらの方はマネジメント、単純には営業をやるとか管理をやるとかそういう人的なコミュニケーションが必要な部分が多いのですが。いろんな所で、私がどういう人材が欲しいのですかというふうに聞くと熱意だとかやる気だとか精神力だとか、チャレンジ精神、そういうことになってくるのですね。精神力みたいな、自己問題解決能力というのですか。問題を発見し、それを自分で解決するというような力をどうやってつけばいいのか、永遠の課題といえばそうなのかもしれませんが、ぜひとも、そういう人たちを教育する、そういう人たちを輩出する面と、それから重要なことをきちんと考えてうまくやっていただくとありがたいと思います。過去から見ると、そういう人は少なくなっているのですね。私も銀行ですけれども大体、就職するときに、去年から就職問題が非常に、経団連で問題になっているのですけど、今エントリーシート出すとき、大体 50 カ所出すのですね。50 カ所出さって、どこでもいいっていうことですね。どこでもいい、引っ掛かればもうけもの、こういう発想でみんな試験を受けているのではないかと私は思っているのですけど、そういうことでいいのかということですよ。そこら辺のところを是非、もうちょっと意志を持って、私はこれをやるぞというような人が一人でも卒業できるようなふうにしていくような大学になってほしいと思っております。よろしくお願いいたします。

(安藤委員長)

どうもありがとうございます。私も過去のバックグラウンドが産業人でございますから、今の山浦委員の言われたことはよく分かるわけでございます。そういう意味でも、さっき金田一先生が言われていた、総合教育のときですね。何を教えるかについてももちろん大事なのですが、どう教えるかっていうのも非常に大事で、そういう点においては総合教育においても、さらに専門教育においても、やはり特徴のある、特に大学生のチャレンジ精神っていうか自主性っていうか、そういうものを育てるようなプロジェクトベースドマネジメント的なことを本当に極めていきたいと強く思っておりますので、よろしくお願いいたします。

さっき事務局から説明ありました点についても何回も議論してまいりましたけれど、いよいよ本格的に建築工事が始まるということですので、是非よろしくお願いいたします。

それでは、大体今日の予定された議事はこれで終わりでございますけれども、最後にまだぜひこれを伝えたい、これを申し上げたいという人があれば、是非この機会にいただきたいのですけども。

(山浦委員)

ちょっと質問いいですか。英語、外国語の先生というのは外国人ですか。

(安藤委員長)

どうですか。英語の先生が9人決まっていますよね。どういう方がいらっしゃいますか。

(金田一副委員長)

ネイティブの方が3名、バイリンガルが1名、通訳の審査員をされている方が1名、ディベートを英語でやっている専門家が1名。かなり英語力があって、キャンパスをみんな、掲示板を英語で書こうかというようなことを議論していただいている、なんか乗っ取られそうな感じで元気な方々がいらっしゃいます。

(安藤委員長)

いいですね、それは。

(山浦委員)

ネイティブの人に英語を習わないと、日本人の英語だとやっぱり無理があるのではないかと思いますので。

(安藤委員長)

はい、全くそのとおりでございます。模擬授業のときなんかは非常に評判良かったですよ。高校生が、こうやって英語というのは接するのだというふうなことを、初めて刺激を受けたみたいな感じが多かったですから。是非今の線でよろしく願います。

それでは最後に、今日は長野市の方から黒田副市長様に出席していただいておりますので、ぜひ最後にお言葉を頂戴できればと思います。よろしく願います。

(黒田オブザーバー)

発言の機会をいただきましてありがとうございます。冒頭、金田一先生から、全体には順調だというお話がありましたので、地元としてまずホッとしているところであります。それから今日、必要な議案の県議会での議決があったということでありまして、今まで知事という執行機関止まりの取り組みだったのが、いよいよ議会に承認されたということは、県全体の取り組みということで大きな一歩を踏み出したということで、大変今日はいい日だというふうに思っています。

一時期、海外の大学のキャンパスを誘致して地域おこしを目指すという動きがありま

したけど、今回、この長野県立大学は生粋の長野県産でございますので、地方創生という意味で大いに期待したいと思っております。

増田課長からも、センターのあり方、これからも検討するのだというお話がありました。私もそれはどうなっているのだろうと心配しておりましたが、地元としても学部は当然ながらセンターとのこれからの連携ですね。こういったものを具体的に我々も考えていかななくてはいけないなということでありまして、大いに期待もしておりますし、また注目もしていきたいと思っております。

今日は総合マネジメントがグローバルマネジメントになったということで、私も市役所に戻って一番困る質問は「総合マネジメントって何やるの？」って質問があったのですがだんだんグローバルという意味合いが出てきましたので、だんだん明らかになってきました。総合という言葉、これをグローバルにしたのですけれども、どうしても多目的、全部くくっちゃう言葉。実はこれが一番難しい言葉でありまして、施設関係造るためには多目的ホール、多目的室っていうのを造りたがるのですが、それは無目的ホール、無目的室だっということ、それはいらぬというような言い方もしてきましたけど、それがだんだん見えてきたのかなということで、中でも起業家、ビジネスリーダー、あるいは地域課題を解決するリーダーという、大分分かりやすくなってきたと思っております。今後また大いに期待しておりますし、地元としても、これは毎回申し上げているとおりでございますが、一緒になって考えていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。それでは、これをもちまして本日の県立大学設立委員会終わりますけれども、委員の皆様方におきましては、先ほど事務局が触れていましたけれども、今回をもって一度委員の全員改選になるということですね。これで一応任期は終了ということでございますので、本当にどうも皆様ありがとうございました。

それでは、これをもちまして今日は終了したいと思います。どうもありがとうございました。

(事務局)

安藤委員長、議事進行大変ありがとうございました。委員の皆様におかれましては、大変長時間にわたり熱心にご議論をいただきましてありがとうございます。

ただ今、お話ありましたような任期の点等、今後の進め方につきまして、最後に課長の増田のほうからご説明をいたします。

(増田課長)

本日は大変熱心なご審議をいただきましてありがとうございました。先ほどご指摘あ

りました入学者の選抜方法につきまして、でございますけれども、本日ご了解を頂戴いたしました概要、資料7でございますけれども、概要につきましては公表いたしまして、早速県内高等学校等にも情報提供をしてみたいと思います。

それから、学校名、寮名、学部・学科につきましては、当委員会が決定いただいた場合には県としてもこの案でまいろうということを経営的に決定しておいたところでございます。従いまして、長野県立大学、後町キャンパス象山寮、それからグローバルマネジメント学部・学科につきましては、今後、これで設置認可申請や広報等を行ってまいりたいと考えております。

先ほどお話ございましたように、当委員会の任期は一応、今月までとしてお願いしてございますが、今後また必要に応じて専門部会、委員会を開催し、重要事項について検討いただき、決定をいただいてまいりたいと考えております。

新年度につきましては、改めてご依頼を申し上げますが、委員の皆様方におかれましては引き続き、開学に向けまして、ご指導を賜りますよう、よろしく願いいたします。任期の末に当たりまして、これまでのご指導に対しまして、準備課といたしましても心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして第6回県立大学設立委員会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

(安藤委員長)

どうもありがとうございました。